

松本清張記念館

◆館報◆

2012.8
第40号

目次

- 松本清張研究会 第26回研究発表会…………… 2
- インタビュー 松永武…………… 4
- 特別企画展「松本清張と映画」…………… 6
- 点描 作品の舞台を訪ねて…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8



柚木はさだ子に 火がついたことを知った。

「張込み」は
昭和三十年十二月、
『小説新潮』に掲載された。

現在入手できる本

- 『松本清張全集』第35巻 文藝春秋
- 『傑作短編集5 張込み』 新潮文庫
- 『松本清張短編全集3 張込み』 光文社文庫
- 『松本清張小説セレクション31』 中央公論

『松本清張選集 張込み』
昭和34年5月 東都書房

作品紹介

横浜駅から九州行きの夜行列車にとび乗る二人の男がいた。柚木刑事と下岡刑事であった。強盗殺人事件の共犯、石井久一の行方を追って、下岡は石井の山口県の生家に向かい、柚木は石井の昔の恋人、さだ子の嫁ぎ先に張込むためであった。

S市に着いた柚木は、さだ子の家の向かいにある旅館の二階に陣取り、さっそく張込みを開始する。彼女が後妻に入った横川は銀行員で、吝嗇な男だった。見ていると、さだ子という女は激しい恋愛の経験など想像もできない、平凡な主婦の印象であった。石井はなかなか姿を現わさない。五日目、集金人が来たあと、さだ子は服を着替えて家を出た。慌てて柚木は後を追うが、見失ってしまう。懸命な探索で、さだ子が男と一緒にバスで山の温泉の方に登っていったことを突きとめた。山道で柚木は二人に追いついた。女は燃えていた。別の生命を吹きこまれ、躍りだすように生き生きとしていた。

石井とさだ子は川北温泉の松浦館という旅館に入った。地元署の応援を得て柚木は石井を逮捕した。何も知らずに湯から戻ってきたさだ子に、柚木は今ならまだ横川の帰宅に間に合うので、「すぐにバスでお宅にお帰りなさい」と促すのだった。

この作品は、昭和三十三年、松竹・大船で映画化(監督・野村芳太郎、脚本・橋本忍)され、「キネマ旬報」ベスト・テンで第八位を獲得した。清張自身、『黒い画集 あるサラリーマンの証言』『砂の器』とともに、清張映画のベストストーリーに挙げている。

(学芸担当主任 中川里志)

松本清張研究会 第26回 研究発表会

平成24年6月2日(土)午後2時 早稲田大学 小野記念講堂

講演

『三・一一』以後の松本清張

講師 高橋敏夫

○早稲田大学教授



幻の原子力研究所もの

二〇一一年三月一日に起きた福島第一原発事故(フクシマ原発震災)はいまだ収束せず、放射能汚染とその影響はとどまるところを知らません。官民挙げての真相隠しも深刻です。東日本大震災からの復興を阻む最大の要因になっているのはいうまでもありません。

松本清張は、今から二〇年前の一九九二年、「現存した社会主義」の大崩壊を目の当たりにしつつ亡くなりました。清張は独自に創り出した社会派ミステリーで権力や権威による隠蔽はもとより、私たち自身による日々の隠蔽をも、執拗に暴露し告発し続けました。しかしなぜか、今回のフクシマ原発震災ではつきりした戦後社会最大級の隠蔽装置、原子力発電所をめぐる作品はない。

日本で原子力利用の大綱が定められるのは一九五五年の原子力基本法ですが、その時示された原子力三原則は「民主・自主・公開」。当初からいかに専制的・従属的で、そして秘密と隠蔽が懸念される特異な領域だったかが分ります。「隠蔽と暴露」の作家松本清張の取り組みがもつとも期待される領域のほず、でしたがついに書かれませんでした。

元中央公論社の編集者宮田穂栄さんが書いた『追憶の作家たち』という本があります。第一章「松本清張」に何と、清張が一九九一年暮れに、グルノーブルの原子力研究所をめぐる小説を企画していたことがちらっと出てきます。フランスのグルノーブル市といえば、一九八七年に第九回の『世界推理作家会議』が開かれ、清張は日本の推理作家を代表し講演をしています。その講演は死後出版された『グルノーブルの吹奏』に収録されました。興味深いのは、日本の優れた推理小説がカワバタやミシマを愛好する偏向的な翻訳家たちによって無視、隠蔽されてきたということから話が始まることです。隠蔽されてきたものの暴露(ここでは顕在化)という清張的ストーリーの講演です。前年にチェルノブイリ事故があり、とくにヨーロッパでは放射能の不安と恐怖が高まっていた。会議の合間には当然、話題になったはずですが、そして滞在中に、清張はグルノーブルにある有名な原子力研究所(民生科学センター)を知ったのでしよう。調べてみると、この研究所には日本からの研究者もいる。おそらく主人公は日本からの研究者だったのではないか。「久々に壮大な長篇推理を書く」と意気込んでいた清張が原子力の問題をどこまで暴露できたか、ぜひ知りたいたいと思いますが、結局書かれませんでした。

そのとき清張は、ヨーロッパ取材を実行する宮田さんに、「黒い福音(一九六一年)の取材を思い出せ、と言ったそうです。何回か聴取を受けたベルギー人の神父が突如出国し、未解決事件になった「スチュワード殺人事件」をモデルに描いた小説で、清張の眼差しは、個人の犯罪の背後にある、社会システム(ここではキリスト教団)に届いています。清張の『黒い福音』発言は、清張の頭の中に、原発大国フランスのグルノーブル原子力研究所で起きた大きな事件と、その背後にある、世界をまたにかけた原子力発電、「原子力の平和利用」体制の黒々とした姿がうかんでいたことを示唆します。

核時代と松本清張 ——『神と野獣の日』をめぐる

清張には兵器として核、原水爆への怒りはあったが、原子力発電の危険を指摘した発言、作品はありません。ここに、『神と野獣の日』(一九六三年)というタイトルの、珍しくSF的作品であるということ以外、従来ほとんど関心をむけられないできた作品を持つてきました。これを読むと、清張が広く核の破滅的影響をどう捉えていたかが分かる。五十分もたらず東京に水爆が落ちる、そのとき政府、そして人々はどう行動するかという極限状況を描いた作品です。この物語からは、いくつもの重要な問題点がかびあがります。

問題点の第一は、清張はこのミサイルの誤射を、アメリカが軸となる西側諸国の内輪の出来事に行っていることです。米ソが原水爆のみならず、平和利用をめぐる競争を繰り広げている冷戦時代ですから、誤射にせよ日本に飛んでくるのはソ連あるいは東側からというのが自然なのに、清張はそうしなかった。物語の随所に、アメリカへの非難がみうけられる。ソ連が登場しないのは、あるいは、社会主義への支持と同時に、「ソ連が始めた原子力の平和利用は世界の文学の新しいページを開く」(小田切秀雄「原子力問題と文学」一九五四年)といった見方が清張の頭にもあったからかもしれない。しかしアメリカ嫌いなら、一九七九年のスリーマイル島事故があったときに、清張は小説を書いてよかったです。謎ですが、書くともこの時点では核

状況においても、アメリカへの非難が強かったことは確かでしょう。

第二に、すでに防衛省が存在します。日本に防衛省が誕生したのは今から五年前にすぎません。なぜか防衛大臣はおらず、まぬけな統幕議長が出てきます。第三に、近未来とはいえず、あくまでもほぼ同時代の日常、しかも多くの視点から描くことでリアリティとともにアクチュアリティーも獲得している。サルトルの「自由への道」など、二十世紀文学は戦争をはじめ大規模な極限状況を描くときには多視点なのですが、この小説はまさにその典型で、核を類を見ない大規模な極限状況と捉えているのです。

そして、第四です。アメリカからたらされた誤射ミサイル迫るの情報を、官房長官は、暴動・パニックが起きるから伏せろ、民衆は何も知らないで死んだ方がよい、と主張します。こんなに弱気の官房長官でも、秩序の側に立つ者はいつとも暴動を恐怖して事実を隠蔽しようとするのです。実際の暴動が秩序防衛のための軍隊から先に起き、三分の一が逃亡したという皮肉な事態も記されます。

五番目は「死の灰」のことです。この小説には二つのヒバク、すなわち「被爆」と「被曝」がきちんと書き分けられています。「被爆」から免れたとしても、風で飛ぶ「死の灰」によって死ぬかもしれない。分っているけれども、人々には見えない「死の灰」については発表されなかった。さらなる絶望を与えないため、という理由で。言うまでもなく、第四、第五については、フクシマ原発震災での政府、東電の対応にあらわれ、「安全」「安心」を繰り返しながら、多くの人々に避けられた被曝を強いてしまいましたが、今も強いています。この首都圏も被曝から無関係ではありません。

そして、第六に観測陣の科学者たちについて。人々が大混乱の中、「生きがいを感じ、張り



切っている」。これらの者たちには「千載一遇の機会」であり、ある意味では「生体実験」である。第七に、東京が危いとなると、首都機能は即座に大阪に移る。この第六、第七も現在にあってはまるのではないだろうか。

以上のように、五〇年近く前に書かれた『神と野獣の日』には、核の持つ破滅的な力についての、今でも充分通用する清張の見方、考え方が示されています。にもかかわらず、一九七〇年代の原発反対運動や原発労働の告発、スリーマイル島原発事故、チェルノブイリ原発事故ときて、まだ清張はうごかなかったのです。

井上光晴『輸送』の「あとがき」

昨年の三月一日以後、わたしはなんと悔しい、重苦しい思いとともに、核をめぐる多くの言説、作品の読み直しを始めました。そこで、井上光晴と松本清張が同じ年に亡くなっているのに気づきました。ともに九州出身です。井上の原子力問題についての深い不安と危惧、そして想像力は戦後作家、現代作家の中で群を抜いています。戯曲「ブルトニウムの秋」（一九七八年。そして『西海原子力発電所』（一九八六年）はチェルノブイリ事故よりも前に書き出された。使用済み核燃料輸送時の事故をめぐる『輸送』（一九八九年）もあります。二人は文学的ポジションは異なりますが、戦前のプロレタリア文学をそれぞれの仕方でも引き継いだ作家だと、わたしは思います。わたしの希望は、井上と清張とのあいだに原発問題をめぐっても繋がりがあつて欲しいということです。記念館館長の藤井康栄さんに先ほど控室で、「井上光晴さんと清張さん、付き合いはなかったですか？」と訊ねましたところ、即座に「どの作家ともほとんど知りませんでした」と答えられました。確かにそうですね。しかしそれでもなお、清張は井上のこれらの作品を意識していたと、わたしは夢想するのです。「井上光晴がここまで書いたから、これでもいい」そして死の直前にはよく

やく「自分には別の書き方がある」と思い始めていたのではないか。その手始めがグルノーブル原子力研究所をめぐる作品なのではないか。井上光晴の『輸送』の「あとがき」の一部です。〈創作『輸送』はその悔恨を踏まえて書いた、核使用済み燃料の輸送にまつわる小説である。核廃棄物の輸送は、今われわれの生存する地点で絶え間なく行なわれており、キャスク（核廃棄物容器）に万一の事故があれば、間違いなくチェルノブイリを再現することになろう〉（あえていうが、『輸送』は近未来小説ではなく、SFでもない。この作の主題は文字通り「明日」にかかわる「今日」そのものの現実におかれている。／ストーリーの行く末に「壊滅の状況」をあえて採らなかつたのも、飽くまで「今日」の生活に密着した人間の痛苦と感情を描きしなかつたのだ）

井上光晴は自らの方法として「今日の」日常に密着した人間の痛苦と感情を描きしなかつたことと書いていますが、それはじつは松本清張が社会派ミステリーで、そしてSF的な『神と野獣の日』においても変わらず実践した方法でありました。社会派ミステリーの最も果敢な試みと、現代小説の社会へ肉迫する試みが、急接近する。つまりは、松本清張と井上光晴がそれぞれの文学ジャンルの富を持ち寄り、急接近して社会の暗部をいきいきと暴露する――。

フクシマ原発震災で、戦後ずっと「隠蔽」されてきた「原子力ムラ」の一部が、明らかにになりました。「隠蔽」は、政府・行政、原子力産業、既成の学問等によってほとんど変わらず、むしろかえって露骨に行使されており、それは今後も長く続くでしょう。松本清張の実践した「隠蔽と暴露」を、清張文学の再読から確認しつつ、わたしたちがそれを、それぞれの場所、それぞれの仕事、それぞれの実践において引き継ぐことが求められています。『いまこそ松本清張的「隠蔽と暴露」の文学を――』を、スローガンではなく、日々の実践としてわたしは少しずつ実現する。本日のお話もその一部なのです。

研究発表

講師 加島 巧

○長崎外国語大学教授



松本清張の『黒地の絵』をノンフィクションとして読む試み

「報道を禁じた駐留軍犯罪」小倉キャンブル黒人部隊の反乱事件（『北九州日日新聞』昭和三十三年五月十四日）

昭和三十三年の秋に、小倉に取材に来たときに、清張さんはこの記事を読んで参考にしたと思う。「黒地の絵」の中で被害届の件数は七十八件、新聞記事にも七十八件と書いてある。祇園太鼓の音について、記事には「アフリカ土人、インディアン時代の血をわきたたせ、いつそその郷愁を駆り立てた」とある。

（太鼓の鈍い音律が、彼らの狩猟の血をひき出した（『黒地の絵』）

米軍資料から見る「黒地の絵」

○「七月十五日付のウイークリーサマリ」
以下のとおり、小倉での黒人兵の集団脱走事件が本部に報告されている。

- ①七月十日夕方に小倉郊外で起こった集団脱走事件については、地方警察が七月十一日にPSD（公安課）に報告している。
- ②約百名の黒人兵が脱走したようだが、翌日朝鮮半島に送られる兵隊のようである。
- ③多くの犯罪を起こしたが、日本人一名死亡、一名重傷。
- ④CIC（防諜隊）による調査では、関係した兵隊は十名で、死亡や怪我をした人はいない。その地区のMPが事態をコントロールしている。
- ⑤第八軍のMPはその事件に気付いてはいなかった。
- ⑥十一日午後には、百名の集団脱走は誇張であることが分かった。
- ⑦約十名の黒人兵が許可を得ずに、日本を出発する前に逃げ出したと思われる。
- ⑧脱走兵を隊に戻す際に、黒人兵は発砲した。
- ⑨日本人にも兵隊にもけが人は出ていない。

⑩兵隊は予定通りの出発のために隊に戻った。

○「黒地の絵」を彷彿とさせる被害届

◇「不法侵入」夜の九時、三人の黒人兵が「こんばんは」と言って入ってきた。兵隊たちはこの被害届を出した人が外に出て関係者に報告すると、すぐに立ち去った。

◇「不法行為」夜の十一時、隣に住んでいるある女性が、「かくまって」と家に来た。被害届を出した人は「便所に隠れなさい」と言ったが、二人の兵隊が入ってきて彼女を連れ出し、夜の闇に消えていった。

◇「暴行未遂」十一時、三人の黒人兵が家にやってきて、「一緒に寝てくれ」と言った。さっぱりと断ったら、一人が口を両手で押さえて、もう一人がぐすぐり始めた。MPが現れたので、兵隊たちは消えた。

◇「一人がシユミーズの上から乳房を玩弄したが、表にMPのジープの音が聞える」と、彼らはガラス戸を破って逃げた（『黒地の絵』）

◇「強盗」夜の九時、四人の黒人兵が酒屋から、ビール三本、スイカ四つ、現金二千七百円をとって逃げた。

AGRS（米軍基地登録部隊）とCICU（中央個人識別班）

ここに三人の日本人（古江忠雄、埴原和郎「骨を読む」、香原志勢）の法医人類学者が勤務し、遺体の個人識別の仕事をしてきた。「認識票」や「ランドリー（洗濯マーク）」「入れ墨」を調べ、「骨を並べる」「歯の記録」をとる。ここでは前段階で、記録係や歯科医がする。「黒地の絵」にも歯科医が出てくる。この後に、法医人類学者が「骨の識別人種の確定」を行う。

「首のない死体を入墨を見た鑑別できる。自分を判別してもらったために入墨ではないか。」「認識票の番号を入墨に入れていた兵隊もいた。

（黒んぼの人相はみんな同じように見えて、見分けがつかまね。けれど、刺青を見たらすぐわかりますね）

（刺青の鑑別方法だつてちゃんとしてる）
（頭のない胴体にはやはり刺青だけが完全な絵で残っていた。）（『黒地の絵』）

※本文中、現在では不適切と思われる表現がありますが、原作を尊重しそのままにしています。ご了承ください。

インタビュー 北九州の映画文化を語る

松永 武

映画産業の華やかなりし時代、スクリーンに映し出される夢の世界に人々は魅了され、こぞって映画館に足を運びました。

その中の一人だった清張は、やがて観客から原作者へと立場を広げます。

そのころのお話を、映画愛好家・松永 武さんに伺いました。

——松永さんが育たれた門司はどんな街だったのですか。

私は昭和一〇（一九三五）年、門司で生まれました。当時の門司は横浜・神戸に次ぐ大規模な港町で、県下でも屈指の賑やかな大都市でした。たとえば新聞社の九州支社も門司に置かれていたように、人や情報が集まり、そして文化も運んできたのでしょう、東京の流行もいち早く伝わる街でした。

明治三六年に東京・浅草に日本最初の映画専用常設館・電気館が開館しますが、早くも四三年には門司にも「電気館」が開館します。九州では長崎に次ぐ二館目の常設館です。古川緑波は、明治末期から大正の初め門司で少年時代を過ごし映画に熱中しました。その頃のことをのちに「門司港は活動映画のふるさと」と書き残しています。私が物心ついたころは既にいくつもの映画館がありました。

祖母は門司市小森江（現在の北九州市門司区小森江）で遊郭を営んでいましたね。当時の小森江は軍需品の下請けの町工場が多く、関森航路という下関との輸送ルートもある賑やかな地域でした。うちにいたお姉さんたちは子ども連れだと外出しやすかったのでしょう、代わる代わる毎日のように映画に連れて行って貰っていました。映画館は子どもがそうそう行く場所ではありませんでしたが、私は恵まれた環境でしたね。覚えていた最も古い映画は「フクチャンの潜水艦」（昭和一九年）、それから「潜

水艦西へ」（一九四〇年、ドイツ、ギュンター・リットウ監督。日本公開昭和一八年）ですね。あの時代の少年ですから、わくわくしながら観ていました。

——松永さんにはとりわけ映画は身近な存在だったのですか。

私がねだるので、家族でも映画館に行きましたね。母は晴れ着を着、特別な日でした。家から一番近かったのは豊国館で、建物は今も残っています。稲荷座では「実演」という、役者の芝居と映画との組み合わせを覚えています。

先生の引率で映画館に行くこともありました。校庭にスクリーンを張る日没後の上映会には大人も詰めかけました。戦時中は戦意高揚のためか戦争映画ばかりでしたが、娯楽の少ない時代ですし、内容はともかく映画というだけで本当に楽しみましたね。

学校での上映会は昭和二三、四年ごろまでありました。GHQの意向か、あまり内容が面白かった記憶はないですが、とにかく映画だということで嬉しかったですね。

——お一人で映画館に行くようになったのはいつごろですか。

十五、六歳でしようか、戦後です。就職してからは仕事の後、毎



昭和33年、若草映画劇場（門司）のプログラム

日のようにあちこちの映画館に行っていました。門司だけではなく、小倉にも足を延ばしていましたよ。

夜十時半頃から翌朝の始発頃までのオールナイト上映や、朝にはモーニングと、映画館には活気がありました。夜勤や三交代の人もありますし、港湾労働者の多い街ですが、悪天候の日は映画で時間を潰す姿をよく見ました。映画館は安くて入りやすかったです。どこもだいたい一階は椅子席、二階は敷席という構造で、お茶子さんがいましたね。

私が物心ついたときは既にトーキーの時代でしたが、戦後しばらくまで無声映画を上映する巡業隊もいました。かけるのはだいたい戦前のチャンバラ映画で、弁士のほか、バイオリン、クラリネット、和太鼓と三味線の五人一組で廻るのです。

役者では「ふんどしもちゃん」との愛称で人気だった市川百々之助をよく憶えています。若松出身の石山稔監督作品に多く出ていますし、戦前から北九州でも多く上映され、人気がありました。

——映画はどのような存在だったのでしょうか。

楽しみが少ない時代です。まず第一に娯楽でした。ニュースもあるから報道の役目も担ってい



松永 武

(まつなが たけし)

1935年3月、福岡県門司市(現・北九州市門司区)生まれ。1997年10月、私設図書館「松永文庫」を開設、収集した12,000点を超える映画関連の資料を公開展示。資料は2009年10月に北九州市に寄贈、現在は「門司市民会館松永文庫」として公開されている。



新世界映劇(昭和32年11月)
提供：門司区役所

ましたね。ニュースと本編の間に流れる予告編も楽しみでしたよ。内風呂が普及するまでは銭湯が情報交換の場でしたね、皆「あの映画を観た」「これはどうだった」と情報交換が盛んでした。

戦後はスクリーンに映る海外の文化が眩しくて。今もそうですが、ヨーロッパ映画は音楽も素敵で雰囲気があり、アメリカ映画は派手で華やか。女性にはファッションのお手本でもあったでしょうね。豊かさに圧倒され、アメリカに対しては、戦争に負けた複雑な思いと憧れと、相反する気持ちを抱いたものです。

小倉の玉屋デパート前にあった「小倉大劇」はGHQに接収されていました。昭和二五年に解除され、私たちが入れるようになった後の劇場プログラムの広告からは、当時の街の様子も伝わってくるようで、いま見ても面白いでしょう。

テレビ放送が始まって、白黒だし放送時間も限られているし、はじめはまったく別のものという感じでした。私が映画産業の斜陽を肌で感じたのは一九七〇年代に入ってからですね。カラーテレビが普及し、週休二日も増え、経済も上向いてレジャーの形が変わったのでしょね。

——清張原作の映画は、北九州では話題になりましたか。

もちろん。「顔」(昭和三年)から観ましたが、やはり「地元出身の作家」と話

題でした。主人公が女性に変えてあるのが印象的でしたし、それまでの探偵映画とも異なる新しいジャンルの映画が出てきたと思いました。

「張込み」(昭和三年)は九州でのロケも話題で、当時の予告プログラムでは「九州・博多・佐賀・柳川・熊本・大分・長門大ロケ話題作！」と謳われています。現在のような有料パンフレットは大作映画にしかなく、映画会社制作のプレスシートを元に各劇場がプログラムを作り、配布しました。これを私たちファンは楽しみにしていたんです。冒頭部、刑事たちが九州まで夜行で一昼夜かけて来る場面は、映画雑誌では「長すぎる」と良い評価ではありませんでしたが、私たちには東京からの距離がリアルに感じられましたね。

もう「点と線」(昭和三年)の頃には、清張さんの名前もすっかり浸透し、併せて宣伝されていたのを憶えています。原作を読んだという話もよく聞きました。清張作品には謎解きだけではなく独特の魅力があります。平穏な日常が揺さぶられたり、一見何もない社会機構に隠された悪が露呈したり。映像化したくなるような表現や描写も多

いですしね。

なんといつても「砂の器」(昭和四九年)は北九州でも人気でした。度々上映されていますが、いつも大盛況ですね。私も何回も観ています。

——清張映画の上映に尽力もされていますね。

昭和六二年五月の「一日だけの門司港映画祭」ですね。まだ清張記念館もない時代でしょう(笑)。北九州が清張さんのふるさとだともっと多くの人に知って欲しくて開催しました。「砂の器」の上映会や、野村芳太郎監督を招いてのトークショーなどを行いました。

野村監督は「砂の器」の撮影時、クライマックスで演奏会の観客が手ぶらでパンフレットを作ってエキストラ全員に配った話をされました。これがそうです、表がちゃんと「宿命」となっているでしょう。中面は映画のあらすじです。

「砂の器」は、「北九州シネマフェスティバル」(平成元年七月)と、「北九州シネマサロン」第六回(平成三年一〇月)と第一七回(平成一九年四月)に上映しましたが、いずれも大盛況でした。映画人口が減った今でも不動の人気です。多くの方に清張映画を観て貰えるのは嬉しいですね。(談)

平成三年一〇月一日松永文庫にて

ききて・構成 ● 小野 芳美

大西 政寛

写真 ● 中川 里志



和賀 英良の演奏会プログラム
仕立ての小道具

松本清張と映画

— 観た 書いた 創った

開催期間 平成24年8月1日(水)～10月31日(水)
 場所 松本清張記念館地階 企画展示室
 入場料 一般 500円 中高生 300円
 小学生 200円 ※常設展示観覧料に含む

最初の原作映画『顔』と最初のテレビドラマ『地方紙を買う女』は同年、昭和32(1957)年に公開・放映されました。以来、55年、3年前の映画『ゼロの焦点』や昨年のドラマ『砂の器』にいたるまで、映画は36本、テレビドラマは500作品以上が制作され、今もリメイクが続いています。本展では、『清張映画』の魅力ある全貌を紹介し、清張と映画の濃密な関係に多面的に迫ります。

I 松本清張と《映画》

清張作品の特徴の一つは《映像的》であることです。加えて、強い構成力とドラマ性が映像作家の創作意欲をかき立て、多くの原作映画・ドラマを制作させました。



元松竹の助監督で推理小説家の著者が、洋・邦画のミステリー映画について縦横に論じています。清張原作映画も『点と線』から『天城越え』まで5作品を取り上げ、『黒い画集 あるサラリーマンの証言』には《ミステリー映画の脚色の見事さ》が見られ、『張込み』は《画期的なミステリー映画》であると評価しています。

『ミステリー映画博物誌』
 小林久三著 平成2(1990)年1月
 勁文社刊

II 《清張映画》館

『砂の器』、『張込み』、『黒い画集 あるサラリーマンの証言』は清張自身が高く評価し、『キネマ旬報』でも高い順位を獲得した名作です。



『砂の器』撮影風景
 制作:松竹=橋本プロ 公開:1974年10月
 監督:野村芳太郎 脚本:橋本 忍・山田洋次
 写真提供:野村芳樹・松竹



『砂の器』絵コンテ
 野村芳太郎監督自筆の絵コンテ
 野村芳樹所蔵



『張込み』
 制作:松竹・大船 公開:1958年1月
 監督:野村芳太郎 脚本:橋本 忍
 写真提供:松竹



『ゼロの焦点』
 台本・準備稿(橋本忍用)
 橋本忍記念館所蔵

III 松本清張の《映画》観

清張独自の《映画》観は戦前からの長い映画経験を経て形成され、その影響は、清張作品の中に《映画》と《映画館》が効果的に使われていることにも現われています。



直筆原稿「声」

十二日の午後三時から川井と浜崎とは新宿で映画を見て、六時ごろ館を出た。二人が小平町の鈴木ヤスの家についたのが七時前であった。(「声」)

「それはKという俳優が主演で、平手造酒の役でした。最初の場面は…」
 静子は話しましたが、映画が好きだとみえて、なかなかたのしそうな表情であった。(「紐」)



『黒い画集2』
 昭和34(1959)年12月
 光文社刊(「紐」収録)

IV 清張が観た映画《小倉時代》

清張は青年期から小倉でたくさんの映画を観ており、洋画をはじめとする映画ファンでした。邦画では、溝口健二監督の『浪華悲歌(エレジー)』や『祇園の姉妹』などをその社会的リアリズムに共感して観ていました。



『望郷』
 1937年制作 フランス
 ジュリアン・デュヴィヴィエ監督
 写真提供:川喜多記念映画文化財団



『第三の男』
 1949年制作 イギリス
 キャロル・リード監督
 写真提供:川喜多記念映画文化財団

企画展協賛映画祭

小倉昭和館(北九州市小倉北区魚町4-2-9 且過市場横)

第1週	8月4日(土)～10日(金)	『眼の壁』 (1958年 清張原作)	『鬼婆』 (1964年 新藤兼人作品)
第2週	8月11日(土)～17日(金)	『点と線』 (1958年 清張原作)	『原爆の子』 (1952年 新藤兼人作品)
第3週	8月18日(土)～24日(金)	『内海の輪』 (1971年 清張原作)	『北斎漫画』 (1981年 新藤兼人作品)

入場料
1,000円
 二本立て

※上映時間など詳細は小倉昭和館にお問合せください。(093-551-4938)



「天城越え」

3

作品の舞台を訪ねて

小説「天城越え」に、「旧天城トンネル(天城山隧道)北口」の印象が語られている。

下田側から「トンネルを通り抜けると、別な景色がひろがっていた。」「空気まで違っているのだ。十六歳の私は、はじめて他国に足を踏み入れる恐怖を覚えた。」「それでも、私はトンネルから湯ヶ島の方へ向かっており行つた。」「湯ヶ島まで来たときには、もう夕方近くになって、初めて見る向こうの連山の上に陽が傾きかけていた。」「修善寺まで行かない、ずっと手前で」陽は山に落ちて、あたりは薄暗く暮れかかった。「私」は、「下田に引き返す決心をした。」すると、そのとき、修善寺の方角からひとりの方が歩いてくるのが目についた。これから天城を越えて、湯ヶ野か、下田の方へ行くのだと直感した。

「ちよどいいわ。下田までいっしょに行きましょうね。」と女は言った。暮れた天城の山道を、このきれいな女とふたりきりで歩くのかと思うと、私の胸の中には甘酸っぱいものがいっぱい詰まった。それはトンネルの入口が遠くに見えるところだった。女は、急に「兄さん、悪いけれど、あんた、先に行つて頂戴」と言った。「あのひとにぜひ話があるんでね、先に行つて頂戴。話がすんだら、また、兄さんに追いつくからね」と、やさしい目つきをした。「私」はとほとほと暗い峠を登つた。土工の横をすり抜けて先に出た。ふりむくとあの女が、土工と

何か話しているのが見えた。「私はそのまま歩いて、トンネルの中にはいった。それから、やっと湯ヶ野あたりの灯が下の方に小さくちらちら見える片側に出た。」

左は、「旧天城トンネル(天城山隧道)北口」の写真である。遠くに見えた「トンネルの入口」とはこれのことである。このトンネルは、下田街道の改良工事の一環として、一九〇一(明治三十四)年に貫通、一九〇四(同三十七)年に完成した。全長四四五・五メートル、幅員四・一メートル、二〇〇一(平成十三年)六月十五日、道路隧道としては全国で初めて重要文化財に指定された。一九一八(大正七年)、旧制第一高等学校二年生だった川端康成は、初めて伊豆を旅行し、旅芸人の一行と道連れとなった。この時、修善寺温泉に一泊し、湯ヶ島温泉の湯本館に二泊した後、天城峠で雨に遭い、折れ曲がった急な坂道を駆け登って来て、峠の北口にあった茶屋に辿りついたという。

今回は、「旧天城トンネル(天城山隧道)南口」を検証する。

「先に行つて頂戴」と言った。「あのひとにぜひ話があるんでね、先に行つて頂戴。話がすんだら、また、兄さんに追いつくからね」と、やさしい目つきをした。「私」はとほとほと暗い峠を登つた。土工の横をすり抜けて先に出た。ふりむくとあの女が、土工と



重要文化財 天城山隧道 記念碑



旧天城トンネル(天城山隧道)北口

友の会 活動報告

朗読劇「波の塔」

4月21日(土) 参加者 112名
記念館 地階ホール

今年で9回目を迎える朗読劇は、雨のため館内での開催となりました。照明や音響効果を最大限に活かし、屋外とは一味違った臨場感溢れる朗読劇となりました。今年も見事な脚本と役者さんの熱演に、参加者から「とても感動しました」「大変すばらしかった」「来年もまた来ます」など称賛の声を多数いただきました。

清張サロン | 記念館 地階企画展示室ほか

清張サロンは毎回テーマを設定し、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・会員同士の交流などを目的に開催しています。第6回、第7回は、友の会会員だけでなく一般市民の皆様も多数参加され、清張や清張作品を楽しんでいただくことができ、充実したサロンとなりました。

第6回 3月22日(木) 14:00~16:00 参加者 48名

- 特別講演会 テーマ「清張と地方史」
- 講師 松本常彦氏(九州大学大学院教授)

第7回 6月15日(金) 14:00~16:00 参加者 57名

- 特別講演会 テーマ「張込み」
- 講師 久保田裕子氏(福岡教育大学教授)

文学散歩「球形の荒野」の舞台を訪ねて

5月13日(日)~15日(火) 参加者 35名

- 1日目 京都駅→昼食(嵐山)→西芳寺→南禅寺→いもぼう平野家本店
- 2日目 飛鳥寺→石舞台古墳→昼食(あすか野)→橘寺→吉野山蔵王堂
- 3日目 唐招提寺→薬師寺→昼食(草の戸)→東大寺→新大阪駅

今回は、「球形の荒野」の舞台を訪ねてをテーマに京都・奈良の旅(2泊3日)を企画しました。天候にも恵まれ、訪問先では普段聞くことのできない詳しい説明や清張さん直筆の書や絵なども見せていただきました。

また、「いもぼう」では実食もあり、参加された皆様から「他では味わえない企画内容だった」「楽しく勉強ができました」などの感想が寄せられました。



友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集

松本清張記念館友の会は8月1日~翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL. 093-582-2761

松本清張没後20年記念事業

松本清張が平成4年8月4日に亡くなってから20年となる今年度の主な記念事業を紹介します。

- 4月1日(日)～10月31日(水)
松本清張没後20年記念
平成24年度中学生・高校生読書感想文コンクール
- 4月1日(日)～25年3月31日(日)
松本清張没後20年記念
第15回松本清張研究奨励事業募集
- 6月1日(金)～8月31日(金)
松本清張没後20年記念
東京・八重洲ブックセンター「清張フェア」
- 7月15日(日)
松本清張没後20年記念 劇団前進座朗読劇『波の塔』
会場：東京・八重洲ブックセンター本店 8階ギャラリー
- 8月1日(水)～10月31日(水)
松本清張没後20年記念 特別企画展
「松本清張と映画 ― 観た・書いた・創った」
- 8月1日(水)
松本清張没後20年記念 常設展展示品リニューアル
- 8月4日(土)
松本清張没後20年記念・
松本清張記念館開館14周年記念講演会
演題 「砂の器」と俳句
長谷川 權(俳人)
会場：北九州市立男女共同参画センター・ムーブ2階ホール
- 8月4日(土)～
松本清張没後20年記念 特別企画展関連映画祭
清張原作映画の上映 小倉昭和館
- 12月1日(土)
松本清張没後20年記念 松本清張研究会第27回研究発表会

- **編集後記** ● 松本清張が亡くなってから20年目の8月4日がきました。この20年の間に1995年の阪神・淡路大震災と昨年(2014年)の東日本大震災という2つの大震災が起こりました。東北地方の復興には時間がかかりそうです。また、今年7月には、九州北部に「これまでに経験したことのないような大雨」(12日付気象庁発表の短文情報)が降り、多くの被災者が出ました。その後一転して猛暑となり、電力不足が懸念されています。暑い日々が続きますが、8月1日からの特別企画展『松本清張と映画』で清張と一緒に昭和を旅してみませんか。(西本 衛)



イラスト：山藤 章二

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館下車)
車：北九州市都市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館



松本清張研究奨励事業 入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」も14回目を迎え、清張研究の促進と成果の蓄積がようやく目に見えてきたところです。今回の入選は1点だけでしたが、地味ながら清張研究の更なる発展を支える基礎的研究として期待されます。

選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

- 企画名 松本清張と地方紙 ― 「黄色い風土」を中心に
- 入選者 山本 幸正(早稲田大学教育学術院非常勤講師)
- 奨励金 55万円

第15回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対 象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動
(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人又は団体も可。
- 内 容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成25年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

常設展展示品リニューアル

記念館では、開館以来継続的に資料の収集を行ってきました。この夏、松本清張没後20年を記念して、展示品の一部を差し替え、追加し、常設展示を充実します。

主な新資料

- 松本清張作詞
足立中学校校歌 原稿(初公開)
- 「黒地の絵」原稿
- 「時間の習俗」原稿
- 「黒革の手帖」原稿
- 「火の路」創作ノート など

